

南阿蘇村の牧野が「未来に残したい草原の里100選」に選定されました

「未来に残したい草原の里100選」とは

かつて草原は、茅葺き屋根の材料の供給源であったり、牛馬の飼養の場であったりと、日本の暮らしを支える存在でしたが、100年前に比べ今では国土の10%から1%にまで激減しました。一方近年では、観光資源として優れ、多くの希少動植物が暮らすなど、多様な価値が見直されています。そこで、「全国草原の里市町村連絡協議会」によって、全国に残る草原とその里を対象とした、人と自然の関わりの中で培われてきた知識や技術、人々の想いを共有し、次世代へ受け継ぐための国内初となる選定事業が開始され、南阿蘇村の牧野が「未来に残したい草原の里100選」に選定されました。



村HP

草原がどのような形で私たちの生活に恵みを与えているのかについて紹介します。

■生物多様性

阿蘇の冷涼な気候と草原は、さまざまな生き物が生育・生息できる環境を育んでおり、生育する植物は約600種とされています。また、ヒゴタイ、ハナシノブなど、阿蘇地域や国内に限られた地域にしか生育していない希少な植物もあります。さらに、草原の植物は多様な昆虫や野鳥が生息できる環境も育んでいます。特に阿蘇は昆虫類の宝庫であり、熊本県産のチョウ類約117種のうち109種が阿蘇に生息しており、「阿蘇はチョウの楽園」とも言われています。



村の蝶でもあるオオルリシジミ

■炭素固定

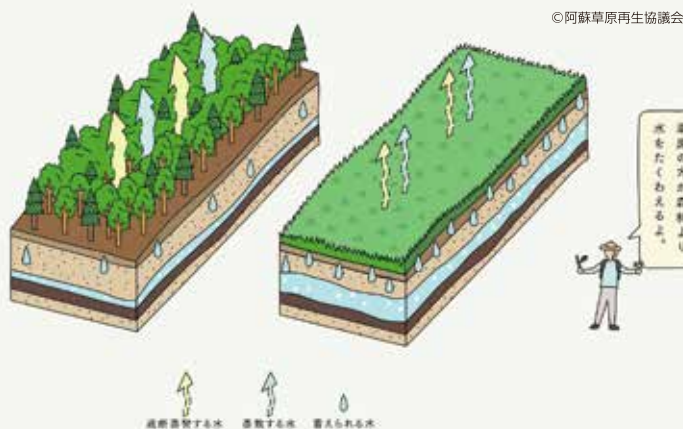
野焼きをおこなっている草原（約16,000ha）の1年間のCO₂吸収量は6.9t/haで、阿蘇郡市の全世帯が1年間に排出するCO₂量の1.7倍に相当する炭素を、野焼きしている草原が固定していることが明らかになりました。草原の維持は地球温暖化に貢献している可能性が高いことが分かってきています。



©阿蘇草原再生協議会

■水源涵養

草原や森林は、雨水を土の中で貯え、ゆっくりと河川に送り出すことで、大雨の時でも一度に水を放出することなく、また、渇水時期でもゆっくりと水を放出し続けることができますが、この機能のことを水源涵養機能といいます。最新の研究によって、年間の蒸散量（根から吸い上げた水を、大気中へ水蒸気として放出する量）が、阿蘇では草原の方が森林よりも小さいことが明らかになり、遮断蒸発量（枝葉にぶつかった雨水がそのまま蒸発する量）も一般的に草原では比較的小さいとされています。つまり、阿蘇の草原は優れた水源涵養機能を有していることが分かります。



©阿蘇草原再生協議会

以上のとおり、南阿蘇の草原が全国的にも貴重な草原であることを再認識していただければ幸いです。